

カナダ先住民の虚像と実像

秋 吉 啓 子

はじめに

多民族国家カナダにおける先住民人口は3パーセントほどで、決して多い数ではない。しかし、かつて「滅びゆく民族」と考えられていた人々が近年はむしろ増加傾向にあり、現在その数はおよそ100万人、アメリカやオーストラリアの先住民比率よりも高いと報告されている¹⁾。政府の広報活動の中で先住民のことが積極的に取り入れられ、各地の博物館でその歴史が紹介され、また、先住民の議員の活躍が報道されるなどの事象からは、その立場が以前より好転しているとの見方もできよう。

しかし、カナダ先住民の歴史・現在の立場を知ろうと様々な情報・文献をたどっていくと、1867年建国という若い国家カナダの中で、先住民が置かれてきた特異な状況が浮かび上がってくる。過去から現在に至るまで、先住民はヨーロッパ系カナダ人から、あるときは侮蔑・敵意を持って、また、あるときは敬意・好感を持って捉えられてきたが、そのいずれもが、実態とはかけ離れたイメージであったり、固定観念から生まれた印象である場合が多い。そして非先住民が先住民について語るとき、その姿勢が先住民に好意的で彼らに寄り添ったものであるとしても、そこには「他者イメージ」が付きまとう。また往々にしてヨーロッパ系が先住民よりも優位な立場を獲得しているという事実が前提となっている。

エドワード・W・サイードは『オリエンタリズム』の中でヨーロッパ人にとってのオリエンを歴大な文献・事例をもとに考察しているが、そこで語られるオリエン（東洋）はヨーロッパ人にとっての「他者」であり、西欧が常に優位にあるという意識に基づいた自分たちの「想像」の中での存在である。序説の中で、サイードは次のように述べている。

オリエンタリズムは、依拠すべき戦略として、融通無碍に優越的位置を制することを常道としていた。そのため、西洋人は東洋とのありとあらゆる可能な関係系列のなかで、常に相手に対する優位を保持することができた。(中略) 東洋に関する知識の概括的見出し語のもとに、また18世紀末以来の東洋に対する西洋の覇権の傘の下で、アカデミーにおける研究、博物館の展示、植民地省の再編、人類と宇宙に関する人類学的・生物学的・言語学的・人種的・歴史的命題の理論的解説、開発・革命・文化的パーソナリティー・民族的または宗教的特質に関する経済学的・社会学的理論の実例など、これらもろもろのいずれにも適合するひとつの複合体としてのオリエンが出現した。さらに、想像力がオリエン的事物を吟味する場合には、多少なりとも排他的に統治者たるべき西洋の至上性の意識を土台としていた。そこで西洋の揺るぎなき中心性の内側から、オリエンタルな世界が出現したのである²⁾。

カナダ先住民の置かれてきた状況を考えると、サイードの語る西洋人をヨーロッパ系カナダ人に、オリエンをカナダ先住民に読みかえてみると、その関係性にかかなりの部分で符合する点があることに気づく。

もちろんカナダにおける先住民の捉えかたは様々であり、ヨーロッパ系との関係を上下で括ることは適切ではない。移民国家における植民者側の心情が複雑であり、自らのアイデンティティを先住民に求める例もあることをベネディクト・アンダーソンは『想像の共同体』の中で述べている。

スペイン語を話すメスティーソのメキシコ人は、かれらの先祖を、カスティリア人征服者ではなく、なかば消滅したアステカ人、マヤ人、トルテック人、サポテック人にたどる。ウルグアイの革命的愛国者たち(トゥパマールス)はかれら自身クレオールであるにもかかわらず、クレ奥ールの圧制に対して立ち上がり、1781年、言語に絶する拷問のすえに死んだ最後の偉大な原住民反逆者、トゥパック・アマルーの名をとった。これらすべての愛着の対象が「想像された」ものであること

一匿名の、顔のないタガログ人同胞、皆殺しにされた部族、母なるロシア、タナ・アイル—これは、あるいは矛盾したことのようにも見えるかもしれない。しかし、アモール・パトリアエ（祖国への愛）は、この点で他の愛と異なるわけではなく、愛にはいつも、どこかたわいない想像力がはたらいっている³⁾。

注目すべきは、ここでもまた、対象になっているのが「想像」の産物であることだ。敵意を持つ場合も、愛着を持つ場合も、人間が「他者」を考えると実像とは別の「イメージ」を抱いてしまうのは避けがたいことなのだろうか。

カナダ先住民が住んでいる地域は、文明博物館（Canadian Museum of Civilization）の資料によると、オンタリオ州の22パーセント（先住民のうちこの州に住んでいる人の割合）を筆頭にカナダ各地に広がっている⁴⁾。先住民の多くがカナダの北方地域に居住しているという見方があるが、実数を見るとそうとは言えないことが分かる。しかし、先住民を北方と結びつけて考えることが多いのも事実で、実際、北方準州の人口に占める先住民の割合を見ると、南の10州に比べ、遥かにその比率は高い。3つの準州はいずれも総人口が5万人に満たないが、先住民の州人口に占める割合は、ユーコンが25パーセント、ノースウェストが48パーセント、ヌナブトが80パーセントである⁵⁾。また、北方地域は広大な自然が残されている地域で、そこに生息する動物と、過去において狩猟生活をしていた先住民が、つながりを持って語られることで、北方地域における先住民というイメージが強まったとも言えよう。

実像とは別の先住民の「イメージ」はどのようにして生まれ人々の意識の中に定着していったのか、都会に住む人たちの北方地域に対する謎めいたあるいはロマンチックな印象は実際とはかけ離れたものなのか、さらに、多文化主義を標榜するカナダ社会において先住民の人々が固定観念から解放され自由を享受できる道は開かれていくのか。修士論文の作成に当たっては、以上の疑問点を念頭に置きながら文献・資料を読み解き、答えに近づく試みをしていきたいと考えた。本稿は論文の一部を構成し、カナダ先住民の虚像が作り上げられていった過程を検証したものである。

1. 呼称に見られる混乱と決意

「コロンブスのアメリカ発見」という表現が不適切だとされ「アメリカ到達」に改められるようになって久しい。周知のようにアメリカ大陸には何千年も前から人々が住んでいたのであり、1492年に「発見」されたのではないし、先住民を「インディアン」と呼ぶのは誤りであるとの認識が一般的になっている。

カナダにおいても長い間、ヨーロッパ人の入植以前から住んでいた人たちが「インディアン」と呼ばれてきたが、現在はその表現を改める流れが大勢となっている。しかし、新たな名称として認められているものが何かとなると、公的な場所における表示・研究書・文献などを見ても統一されていない。法律上の用語にしても、「登録インディアン（registered Indian）」の名称は現在も使われており、政府機関としての「インディアン問題および北方開発省（Department of Indian Affairs and Northern Development）」も存在する。先住民自身が、自ら「インディアン」と名乗る場合も少なくない。ただし、先住民以外の人々が現在の先住民について語るときは、「インディアン」以外の名称を用いるのが一般的である。いずれにせよ、統一的な呼び名がないため、場面により様々に表現されているのが現状である。そして先住民の研究者が自説を展開する際は、前置きとして呼称についての説明をしている例が多い。説明の中で著者自身の先住民に対する姿勢・問題意識を提示しているとも言えるのである。エドワード・ヘディカンが著書『先住民問題の理解（*Understanding Aboriginal Issues*）』の序論で次のように述べている。

先住民（Native people）を指す様々な呼び名が大変な混乱と誤解を招いてきたことは多くの人の知るところである。従ってまずこのことについてはっきりさせておくのが本論の始めにあたり有用であろう。本書の中で、私は広い意味の先住民に対してアボリジナル（Aboriginal）という言葉を使う

ことにした。1982年憲法第35項には次のような記載がある。「この法において『カナダの先住民 (aboriginal peoples of Canada)』に含まれるのはカナダのインディアン、イヌイット、メティスである。」私の用法はこれと少し異なり大文字で始まるアボリジナルである。この言葉は形容詞として用いられることが多く大文字の記述は一般的ではない。しかし、私はアボリジナルの人々の願い、民族のアイデンティティに敬意を払って大文字を使うことにした⁶⁾。

呼称に対する著者の思い入れと気の使い方がよく表れている一節であるが、ヘディカンにはさらにオックスフォード辞典のアボリジナルの説明を引用しこの語の正当性を主張している。オックスフォード辞典に載っているアボリジナルの記述は「歴史の黎明期から、あるいは、植民者の到着以前から土地に住み続けてきた」となる。ヘディカンはこの意味するところは憲法の内容ともよく適合していると述べている。一方ダニエル・フランシスは『想像上のインディアン (The Imaginary Indian)』の序論でこう書いている。

先住アメリカ人 (indigenous Americans) に対する正しい用語に関しては、近年多くの議論がなされている。インディアンと呼ばれることに異議を唱える人もいれば、唱えない人もいる。インディアンに代わる用語としては、アボリジナル (aboriginals)、ネイティブ (Natives)、アメリンディアン (Amerindians)、ファースト・ネーションズ (First Nations) などがあり、他にも私の知らない表現があるであろう。本書において私は、非先住民 (non-Natives) が先住民 (Native people) に対して抱くイメージを語る場合はインディアン、現実の先住民 (Native people or aboriginals) に言及する場合はネイティブ (Natives) と呼ぶことにする。同様に非先住民の呼称もやっかいである。インディアンに対応する言葉としては白人 (White) が便利な言葉だが、意味が限定的なことも確かである。多文化主義の現在、ヨーロッパ系カナダ人 (Euro-Canadian) という表現も用いられるが、何ともぎこちない用語である。私がこれらの言葉を使うことを読者の方々にはご容赦いただきたい⁷⁾。

フランシスも先住民の呼称にかなり神経を使っていることが窺える。因みにこの2冊の研究書が出版された時期は、1995年と1992年である。これに遡ること10年ほど前に先住民の歴史と現状についての本『カナダ・インディアンの諸部族 (Indian Peoples of Canada)』がパーマー・パターソンによって書かれ、1982年に出版されているが、本のタイトルがそうであるように、特にこだわることなく先住民についての記述でインディアンという呼称を使っている。パターソンの場合は、先住民に関わる制度や立場に言及する際にむしろネイティブやアボリジナルという用語を使用している。例えば、「先住民の権利 (native rights)」や「先住民としての立場 (their aboriginal status)」などの表現が見られる⁸⁾。また、アラン・D・マクミランの著書『カナダの先住民とその文化 (Native Peoples and Cultures of Canada)』の初版が1988年に、改訂版が1995年に出ているが、初版の前書きの冒頭で著者は、「近年カナダのファースト・ネーションズに対する人々の意識は一段と高まっている」と述べ、改訂版の前書きでは、国勢調査による先住民の人口増加に言及し、「先住民族 (aboriginal peoples)」「先住民人口 (aboriginal population)」といった用語を使っている⁹⁾。呼称の変化について即断はできないが、1980年代の様々な差別撤廃の潮流の中で、先住民への配慮といった視点から新たな呼称が求められてきたと言えそうである。

2. 「滅びゆく民族」と見なされた先住民

先住民に関わる史実を詳述することは本稿の目的ではないので、ごく簡単に歴史を概観すると、カナダ先住民とヨーロッパ人との接触は16世紀の毛皮交易から始まる。最初に進出したのはフランス人だが、後にイギリス人が勢力を伸ばし、1670年にイギリスは毛皮交易のための独占の特許会社であるハドソン湾会社を設立、以後、北方地域に住んでいた先住民から毛皮を獲得、先住民は生活用品や狩猟に役立つ道具などを入手するようになる。ヨーロッパ人の入植は年を追って増え、1867年にカナダ連邦成立、鉄道建設も進み、急速に近代化されていくことになる。

移民国家カナダが発展するにしたがい、先住民は必然的に少数民族として周辺化されていく。その過程で先住民は様々な形で研究、小説、芸術、さらにはエンターテインメントの対象となってきた。その目的も学問的関心によるものから商業的野心によるものまで種々雑多であるが、いずれの分野においても、「インディアンは絶滅するもの」という共通の捉え方が見受けられる。マクミランは、1932年に発行されたダイヤモンド・ジェネスの『カナダのインディアン (The Indians of Canada)』が先住民の伝統的生活様式を記した優れた本だと評しながら、ジェネスが先住民を絶滅する運命にあると結論づけた点について、その予測は「幸いにも」間違いであったと述べている¹⁰⁾。ジェネスの考えでは、先住民は消滅するか、ヨーロッパ系カナダ文化に吸収されて20世紀の終わりにはほとんど生き残っていないことになるのである¹¹⁾。一方ヘディカンは、人類学の研究が陥りがちな問題点として、「意図しているにないにかかわらず、[[北米の人類学で] 伝えられるものが、インディアン文化は消滅するか、少なくとも、大々的に変貌してしまうという印象なのである」と述べている¹²⁾。さらに気をつけるべきこととして、「人類学は、保護者的な立場で先住民の利益を代弁しようとする一方、彼らを社会の主流派に適応させる道を探そうと試みたりする場合がある」と指摘している¹³⁾。実際には、「先住民は、昔とは変わりつつも新たな文化的バイタリティーをもって現在なおしっかり存在している¹⁴⁾」のである。

1845年に画家のポール・ケイン (Paul Kane) はトロントを出発、五大湖からマニトバを経て太平洋岸にいたるまで3年間にわたるスケッチ旅行を行った¹⁵⁾。ケインの目的は、「インディアンが消滅してしまう前にその伝統的慣習・風貌をキャンバスに保存しておく」ことであった¹⁶⁾。ケインの絵は、オタワの国立美術館・文明博物館などに展示されており、また、ほとんどの歴史の教科書に先住民の様子を示すため彼の絵が掲載されていて、カナダの人々にはなじみの深いものである。彼の作品は、インディアンのダンス、槍を持って立つ酋長、バッファローの狩りなど、当時の先住民が周りの景色とともに緻密に生き生きと描かれていて見ごたえがあるが、問題は、真に迫ったその描写が必ずしも真実ではないということである。旅行者として先住民を眺め、近い将来絶滅するだろうという意識を土台に、エキゾチックなものへの嗜好を満たす絵を作り出したのではないかという批判が、近年ケインに対して投げかけられている。「高貴な野蛮人 (noble savage)」を記録する¹⁷⁾ことを目指していたケインは、実際に目にした先住民に対して差別意識や嫌悪感を持ったにもかかわらず、作品では当時のビクトリア朝的趣味に合わせ、優雅でロマンチックな文明化されていないインディアンを描き出したのである¹⁸⁾。また、彼は先住民の言語は話さず、その習慣・文化についても表面的な理解しかしていなかったと指摘されている¹⁹⁾。1859年に出版されたケインの旅行記『北米インディアンと共に過ごした画家の放浪の旅 (Wanderings of an Artist among the Indians of North America)』はベストセラーとなり、その後4年間にフランス語、デンマーク語、ドイツ語に訳されたほどの人気を博したが、その中には次のような先住民に対する蔑視や差別的感情が表れた記述がある。

彼らの言語は野蛮で、舌や唇をきちんと使わない不快で耳障りな音をつばきを飛ばしながら発する。

また、彼らは不潔で、シラミと一緒に暮らしており、娯楽のひとつとして、お互いの頭からこの気味の悪い虫を取り合っている²⁰⁾。

自分が理解できない言語に対してこのような表現をすること自体、明らかな差別だが、他にもケインはアルコールに溺れる先住民への不快な思いを述べるなど、彼の先住民に対する眼差しは、彼らを「他者」として下に見るものであった。しかし、彼の描く絵の世界は、「白人と接触する以前の文明に汚されていないインディアンたち」でなければならず、ケインはたくさんのスケッチをもとに旅行の後、次々と人々に感銘を与える作品を生み出したのである。したがって後年、彼の作品のいくつかが全くの作り物であったことが判明したのも不思議なことではない。インディアンの母子を描いた『フラットヘッドの母と子 (Flathead Woman and Child)』はチヌック族の子供のスケッチとカウリ族の大人の女性のスケッチをひとつの絵にまとめたもので、当時のブルジョワ階級が親子の絆や情愛を重視するようになった風潮を反映しているとヘザー・ドーキンズは指摘している²¹⁾。また、彼の最も有名な絵画のひとつである『ア

シニボイン族のバッファロー狩り (Assiniboine Hunting Buffalo)』は実際には、馬に乗って牡牛を追う二人の若者を彫ったイタリアの版画をもとに描いたものだったのである²²⁾。

ドーキンは「ポール・ケインの作品はその帝国主義的かつ人種差別的言説がある以上公式の伝記的レベルで捉えることはできない」と厳しい指摘をしているが²³⁾、先住民を描いた他の画家や、彼らと関わった様々な人たちが、その立場のいかに問わず「滅びゆく民族」という認識を持っていたことは確かである。実際、18世紀後半から20世紀前半にかけて、天然痘、インフルエンザ、結核など、白人が持ち込んだ病気が先住民の間で何度か大流行し、多くの死者を出したこともあり²⁴⁾、第二次世界大戦まで先住民のカナダ人は「インディアンは消え行く運命」だと考えていたのである。ケイン以降、時代が進むと「滅びゆくインディアン」のイメージは、消えていくものを前に何もできないという罪の意識を持つセンチメンタリストにアピールする一方、政府の政策を恥ずべきものとして糾弾する批評家を力づけた。また、人種差別主義者にとっては、自分たちの生活様式の優位性を再確認する格好の材料となった²⁵⁾。いずれにしても、対象を「滅びゆくもの」—英語での表現では、vanishing、disappearing、dying out、さらにはextinction—と定義したこと自体に、植民者的意識が潜んでいたことは否定できないだろう。

現実の先住民は消えてしまうどころか、第一次世界大戦を契機に、政治活動にも積極的に関わるようになった。大戦後、カナダで最初の先住民の組織、カナダインディアン連盟 (the League of Indians of Canada) が設立され²⁶⁾、政府に対し、教育の改善、狩猟や漁業の権利確保、土地の請求など様々な要求を突きつける活動を始めたのである。しかし、ステレオタイプなインディアンのイメージは簡単に払拭されるものではなかった。

3. エンターテインメントに現れた先住民

アメリカで西部劇が一世を風靡するずっと以前に、人々を喜ばせたカウボーイとインディアンのショーがあった。そのショーを企画したのが、バッファロー・ビル (Buffalo Bill) と呼ばれたウィリアム・F・コーディ (William F. Cody) である。コーディは1846年生まれのアメリカ人で、南北戦争に参加、その後鉄道建設の工夫に肉を調達するため膨大な数のバッファローを殺し、その経歴からバッファロー・ビルと呼ばれるようになった人物である。また、実際に先住民と闘い、イエロー・ヘアーというシャイアン族の酋長を殺した経歴を持つ。大衆小説家がコーディをモデルにした本を書いたことから有名になり、彼はこれを利用してショーを披露することを思いつく。ちょうどその頃1885年に、スー族最後の酋長と言われたシッティング・ブル (Sitting Bull) がカナダにやって来てコーディのショーに参加することになる。

バッファロー・ビルのワイルド・ウェスト・ショー (Buffalo Bill's Wild West Show) と銘打ったこの見世物は大変大がかりなもので、トロントでの興行を行うために、18両の列車を使い、150人のカウボーイ、インディアン、メキシコ人、それに何頭もの動物を運んだとグローブ紙が伝えている²⁷⁾。さらに、ショーの会場に向かう一行の様子を「馬上のバッファロー・ビルはハンサムで格好よく、この興味深いパレードを一目見ようと沿道に集まった大観衆を熱狂させている」と記し、「このショーに登場する人々は、そのために訓練された俳優ではなく、ほとんどの人たちが実際の場面で経験したことを観客の前で再現するために集められたのだ」と「本物のインディアンやカウボーイ」が演じるワイルド・ウェスト・ショーを絶賛している。ショーは、馬の曲乗り、バッファロー狩り、インディアン・ダンス、競馬、早撃ちなど、いろいろな出し物を含んでいたが、一番の目玉は、バッファロー・ビル率いるカウボーイとシッティング・ブルたちインディアンの戦闘場面だった。また、宣伝によると実際にブラックヒルズで使われていた駅馬車を使い、インディアンから襲撃された人たちをバッファロー・ビルたちカウボーイが救い出すという筋書きの活劇が演じられた。スー族がカスター率いる騎兵隊を全滅させたことで有名

な「リトルビッグホーンの戦い」も題材に使い、戦いが終わった後の舞台にバッファロー・ビルが登場し、「遅すぎたか!」と嘆くシーンも演出されたのである²⁸⁾。

いったんはスー族の居留地として保証したブラックヒルズの地を、金鉱が見つかったために取り戻そうとした合衆国側の策略がきっかけで勃発したのが「リトルビッグホーンの戦い」であり、シッティング・ブルはこの戦闘に勝利したものの、結局その後の掃討戦に屈し、ブラックヒルズの地を追われたのである²⁹⁾。その彼がカナダでのワイルド・ウェスト・ショーで悪役側のインディアンを演じることになるのだが、そのことに抵抗感はなかったのか気になるところである。また彼以外にも大勢の先住民がショーに加わっているが、その理由は様々だったようである。ひとつには、たとえ観客の前での演技にせよ、自分たちが誇りを持って行ってきた伝統的な技、馬乗りや槍投げができるいい機会であると受け入れたこと。また、居留地から一時的にせよ厄介払いをしようとした政府職員に参加を促されたこと。そして当然ながら、支払われるお金に惹かれたことがある³⁰⁾。先住民を巻き込んでこのショーはかなりの期間人気を保ち、ニューヨーク公演を始め、ロンドンなどヨーロッパへも遠征したが、当時のカナダの観客はこのショーをどんな思いで見っていたのだろうか。ワイルド・ウェスト・ショーを真似た企画も含め、このようなショーは第一次世界大戦頃まで行われ、一部は1930年代まで続いたが、観客側の受け取り方も時代と共に変わっていったと思われる。

シッティング・ブルがショーに加わった1885年夏は、政府に対し先住民を率いて「反乱」を起こし逮捕されたルイ・リエル (Louis Riel) が獄中にいた時期で、世の中は騒然としていた³¹⁾。人々にはショーの中でインディアンが制圧されるのを見て安心したい気持ちがあり、それが初期のワイルド・ウェスト・ショーの人気を高めていたと思われる。世紀が変わり、先住民の「脅威」がなくなるにつれ、人気もかげってくるが、この時期になると観客の気持ちもフロンティア消失に対するノスタルジアへと変化していった。いずれにしても、実生活で先住民との接点がないカナダ人は、生活人としての普通の先住民の姿を見ることはなく、演じられたインディアンのイメージが彼らの中に定着していったのである。

ジョン・ウェイン主演の『駅馬車』に代表されるハリウッドの西部劇は1960年頃まで何本も製作され隆盛を誇ったが、そこに登場する「インディアン」が白人側の固定観念で作上げられた差別的なものであったということは、その後の共通認識となっている。偏見に対する反省を土台に以前とは違う視点での「新しい西部劇」が1990年以降作られるようになり、ケビン・コスナーの『ダンス・ウィズ・ウルブズ』はアカデミー作品賞・監督賞を獲得、多くの人々の注目を集めた。以前の西部劇が先住民を凶暴、残忍、野蛮なイメージに固定していたとすれば、新しい西部劇の先住民は自然を大切にする知恵のある人々として描かれている。しかし、いずれの場合も、先住民は「過去」の人であり、「辺境」の地に住む文明から遠い存在である。映画は決して現実の先住民を描いてはいるのではなく、白人側の気分を反映した創作なのである。「獅子舞を跳ぶインディアン」を見て文明人としての自分たちの優越性を味わうにせよ、「自然と共生するインディアン」を見て環境を大切に思う自分たちの意識の正当性を確認するにせよ、そこには、あとからやって来た植民者としての自分たちを正当化したい潜在意識が隠れていると言えよう。

4. 有名になった先住民

演じられる先住民ではなく、先住民が人々の前で自らの言葉で語り、世間の注目や共感を集めた例として、ポーリン・ジョンソン (Pauline Johnson) が挙げられる。ジョンソンは詩人として活躍し、1961年の生誕100年には記念切手が発売されており、また、現在も子供たちが彼女の詩を学校で習うなど、カナダでは広く知られている³²⁾。

彼女はオンタリオ州のインディアン居留地で生まれた。父はモホーク族の酋長、母はイギリスのブリストル出身の白人女性で、この結婚はお互いの家族から大反対されたようである。母の影響で子供の頃

からイギリスの古典、特にロマン派の作家やシェイクスピアの作品に親しんでいたジョンソンは、10代後半から詩を書き始め、その作品がトロントの雑誌に掲載されたりしていたが、30歳までの彼女は無名の詩人だった³³⁾。ジョンソンの人生に大きな転機をもたらしたのは、1892年1月にトロントで催されたヤングリベラルズクラブでの詩の朗読会だった。会の主催者フランク・イエイ (Frank Yeigh) がジョンソンのクラスメートで彼女の詩を読んでいたこともあり、この夜の会への参加を依頼したのだが、その後の成り行きはふたりが予想もしていないものであった。ジョンソンが朗読したのは「インディアン」の妻の嘆き (A Cry from an Indian Wife)」という詩で、1885年の「メティスの反乱」に加わった夫への思い、白人によって奪われた土地への嘆きが謳われたが、朗読が終わると聴衆から熱狂的な拍手が起これりアンコールを求められた。そこで改めて読んだ詩が、囚われの身となったモホーク族の強い意志と悲哀を謳う「レッドマンの死 (As Red Men Die)」であった。再び聴取は大喝采を送り、彼女はトロントの文学界に大旋風を巻き起こしたのである。グローブ紙の評者は、「かつてこの国を所有していた人々、我々の文明の前に力を失っていった人々の声が、その子孫であるこの才能ある洗練された柔らかな声の持ち主によって語られた」と述べている³⁴⁾。

この成功に触発されたイエイは、一緒に詩の会を開催しようとジョンソンに持ちかけ、以後「インディアン女流詩人」によるリサイタルが各地で開かれる。過密なスケジュールの中、ジョンソンはハリファックス、ニューファンドランドからブリティッシュコロンビア、さらにはアメリカのボストン、ニューヨーク、そしてイギリスのロンドンへも足を伸ばす。批評家たちは彼女を賞賛し、ニューヨークサン紙は、「この大陸の文学界において類まれな人」と記し、他にも「カナダ文学におけるもっとも人気のある作家」「カナダ先住民の声」「最高の女流詩人」など多くの賛辞を浴びることになる。ジョンソン自身は、自分の人気「インディアン」であることのエキゾチシズムの上にあると感じ、「モホークのプリンセス」「インディアン」の聲」と呼ばれていることについて、「ヨーロッパ人」のヒロインが登場する物語などないのに、と語っている³⁵⁾。

ジョンソンが人々の人気を集めた理由として、ひとつには、前節でも述べた時代背景が考えられる。カナダの先住民は「平定」され、居留地に住むようになって、フロンティアはほぼ消滅、白人の側にセンチメンタルになる余裕が生まれてきた時期であった。もうひとつの理由は、ジョンソンが「白人好みのインディアン」だったことがある。パフォーマンスを行う際、彼女は2種類の衣装を用意していた³⁶⁾。前半ではイギリス風のイブニングドレスを着、後半でインディアン風の衣装を身に着けたのである。バックスキンのドレスにウサギの毛のアクセサリー、銀のブローチをつけ、ハンティングナイフを下げたジョンソンを人々は好んで「モホークのプリンセス」と呼んだ。彼女の語った言葉としてよく引用される「私の目標、私の喜び、私の誇りは、私自身の民族の栄光を歌うことです」という一文があるが、自分の目的をかなえ、自作の詩を発表するために、彼女は一種の妥協をして白人たちの期待に応えるパフォーマンスを続けたのである。当時、英語を読み書きする先住民は少なく、ほとんどの先住民は社会の片隅に追いやられており、白人たちとの接点もほとんどなかった。そのような時代に、目鼻立ちの整った上品な容貌の「インディアン」を人々は歓迎したのである。見方を変えれば、ジョンソンの生い立ちそのものが、「インディアン」と「白人」のハイブリッドで、彼女自身白人社会を肯定的に捉えていたところがあり、彼女のそのような面が広範な人気のもとになったとも言えよう。

「私の櫂が歌う歌 (The Song My Paddle Sings)」という詩は、カヌーと一体になって自然の中の川を下っていく様子が生き生きと描かれていて、現在でも子供たちの本に定番として載っている有名なものだが、自然と親しい関係を持っていた先住民としての側面が、ジョンソンの詩の人気を高めていたことも、見逃すことはできない。彼女は、1913年に病死するが、その後、自然との共生・自然保護の推進者として有名になった「インディアン」にグレイ・アウル (Grey Owl) がいる。彼は、1931年に『最後のフロンティアの男たち (Men of the Last Frontier)』という本を出版し、野生のままの自然 (wilderness) の大切さを訴える。オンタリオ州北部でわな猟師 (trapper) をしていたが、イロクワ族の妻の影響で自

然保護に情熱を傾けるようになったのだと、自分の出自を説明していたグレイ・アウルがこの本が出版されるや、「産業化が進む文明社会の恐るべき破壊力の前に野生空間はあっという間に消えようとしている」³⁷⁾という彼の警鐘は人々の心に強く響き、アメリカ、ヨーロッパ両方で大変な評判になる。作家活動の他、精力的に講演会を行ったグレイ・アウルは、イギリスでもたくさんの講演をこなし、バッキンガム宮殿でロイヤルファミリーを前に話す機会を与えられたほどだった。

バックスキンのジャケットを着てモカシンの靴を履き、黒い髪を二本の三つ編みにして後ろに垂らしていた彼の姿は、聴衆の目にはまさに「北米インディアン」を体現したものとして映ったのである。ニューヨークタイムズ紙は「グレイ・アウルは縫いぐるみのインディアンではない、本物だ」と記した。また、イギリスで彼の本を出版したロバット・ディクソン (Lovat Dickson) は不況の時代にグレイ・アウルが人々に与えた印象を次のような賛辞として述べている。

森から届いたこの声はいつとき我々を呪いから解き放ってくれた。ヒトラーのわめき散らす叫び声や、近代科学技術の執拗な騒音とは対照的に、グレイ・アウルの言葉は、我々の心に忘れられない魅惑的な世界を浮かび上がらせた一人間と動物が愛と信頼で結ばれて暮らしていた涼しい静かな場所を³⁸⁾。

わな猟師から自然主義者への変身を遂げた過程を描写した『野生の巡礼者 (Pilgrims of the Wild)』が出版されると、これもすぐにベストセラーとなった。カナダの行政府は、野生動物保護や国立公園運営にグレイ・アウルの知名度を利用しようと考え、公園部 (the Parks Branch) がビーバー保護のために活躍する彼の姿を映画に撮って、国中の学校・クラブ・団体で放映した。また、彼は「公園動物保護司 (caretaker of park animals)」として、マニトバ州のライディング・マウンテン国立公園で、後にサスカチュワン州のプリンス・アルバート国立公園で仕事をするようになり、彼の存在は、公園への観光客を集める牽引力になると同時に、人々の動物保護への関心を高める役割を果たしたのである。

1938年、グレイ・アウルが肺炎で亡くなってまもなく、人々は、彼が実際はインディアンではなく、イギリスからの移民で本名はアーチャー・ベラニー (Archie Belaney) だったことを知らされる。家庭的に恵まれなかった彼は、森の中で何時間も野生動物を相手に過ごす孤独な少年時代を送っていた。北米先住民に興味を持ち、「インディアン」についての本を何冊も読んでいたこの少年は、1906年、17歳のときに、野生生活をする男 (wilderness man) になろうとイギリスからカナダへ渡ったのである。オンタリオ州北部で暮らし始めたベラニーは、木こりやわな猟師の技術を習得、髪を伸ばし、皮の服を着て、先住民女性と結婚し、「インディアン」になったのである。その後の歩みはグレイ・アウルとしての彼が自伝の中で書いているものと重なっていて、2度目の結婚相手となったイロクワ族の妻との生活の中で、ビーバー狩りをやめ、動物の味方になる決心をする。彼が、偽のインディアンであることに先住民は気づいていたが、自分たちのために行動し、政府役人とのパイプ役もしてくれる彼を支持していたようである。彼自身は、自然保護の活動をし、自分の主張を訴えていく上で「インディアン」であることは大いに助けになったので、髪を黒く染め、インディアンらしく振る舞うという芝居を最後まで続けたのだった。

グレイ・アウルが「偽者」だったことについては、その後の論調を見てもあまり問題にされていない。彼が働いていたプリンス・アルバート公園の長官J. A. ウッド (J. A. Wood) は、「私は彼がイングランド人だろうがアイルランド人だろうがスコットランド人だろうがあるいは黒人だろうが気にしない。彼は偉大な精神を持った偉大な男で、偉大な目標を持ち続けていた。」³⁹⁾と述べ、彼の活動を高く評価している。カナダ政府がホームページで紹介している「カナダのヒーロー」の中でも、グレイ・アウルは「偽りの役を演じていたが、彼の自然保護への思いは本物で、世界中の人々に影響を与えた」⁴⁰⁾と記されている。

では、先住民側から見た場合、グレイ・アウルの果たした役割はどう評価されるべきなのか。功罪ともにあるというのが、妥当なところかと思われる。彼の活動によって、先住民が何千年も前から「森林

の保護者」「動物の管理人」として自然との共生生活を送ってきたこと、先住民の知恵が自然破壊を食い止めるために役に立つということ、などが広く認知されるようになった。実際、狩猟生活をしていた先住民は、獲物を獲り過ぎないように、必要以上に大人数で行う狩りは避け、適正な規模の狩猟でグループの構成員が生活していける分だけを確保するというやり方を長い間続けてきたのである。獲った動物については、すべての部位を無駄なく活用し、まさに省資源を実践してきた人々であった。また、植物にも精霊が宿っているとして敬う気持ちを持っていた先住民は、バスケットを作るために樹皮や木の根をとるような場合も、祈りを捧げたという⁴⁰⁾。このように考えると、グレイ・アウルは、先住民の生き方が肯定的に捉えられるための推進役を果たしたと言えるのである。しかし、一方、彼の主張が、先住民を「森林」「荒野」「自然」「環境」という分野に限定して捉える固定観念を生み出したことも否めない。「インディアン」らしく見えるように、髪を黒く染め、肌をヘンナ染料で赤褐色に変え、羽根の髪飾りをつけて人々の前に現れたグレイ・アウルの「変装」⁴²⁾がステレオタイプな先住民のイメージを強めてしまった面もあるだろう。都会に住み、ごく普通のカナダ人として暮らそうとしている先住民にしてみれば、固定的なイメージで括られることが不愉快であることは想像に難くない。

ポーリン・ジョンソンもグレイ・アウルもヨーロッパ系カナダ人にとっては「他者」としてのインディアンであり、サイドの表現を借りれば、「西洋の揺るぎなき中心性の内側から」眺める対象物としての先住民であった。そしてふたりとも、結果的に、ヨーロッパ系の人たちの想像上のインディアン役を見事に演じたのである。

5. 生活する先住民のメッセージ

ウィニペグに住む先住民親子の実体験をもとに1993年に製作された短編映画がある。『アンジェラのために (For Angela)』⁴³⁾ というこの映画は、母親のロンダ・ゴードン (Rhonda Gordon) と小学生の娘アンジェラがバス停で白人の中学生3人と出会ったことから話が始まる。少年たちはふたりを見て、「ひとり、ふたり、3人のインディアン・・・ (One little, two little, three little Indians...)」とからかう調子で歌い始める。ふたりは少年たちを無視してバスに乗り込むが、同じバスに乗った少年のうちひとりには特に執拗で、「英語、話せるの」などと露骨に嫌がらせをする。バスの他の乗客たちは落ち着いた様子を示しながらも、特に反応はせず、ふたりも無言のまま通す。その夜、アンジェラは母親に何か言いたげな素振りを見せるが、家に仕事を持ち帰っていて忙しいロンダは、娘に注意を払う余裕はなく夜更けまで机に向かう。ふと気になって洗面所の方へ行った彼女は、そこにアンジェラの髪が散らばっているのに気づき愕然とする。アンジェラは後ろ髪を太い一本の三つ編みにしていたが、それを自分でばさり切り落としていたのである。アンジェラの辛い気持ちを痛感したロンダは、行動を起こす。娘の心を傷つけた少年を突き止めるため、娘と一緒に中学を訪れ、学校側の了解のもと、校内を見て回るのである。見つけられた少年は、最初、ふたりを知らないし見たこともないと、言い張るが、ロンダは娘に起こったことを冷静に少年に説明し、ようやく、少年も自分のしたことを認める。映画の最後にロンダ本人がアンジェラと共に登場し、いまだに存在する先住民に対する偏見について話をする。その中で、彼女は、現在でも先住民というと、「ビーズ (beads)」と「ブレイズ (braids) = 三つ編み」だけのイメージで見る人が多いと語っている。

現在、人種差別的言動がいけないという認識は人々の間に浸透しているはずであるし、少なくとも常識的な大人が不適切な態度をとることはないと思われる。しかし、この映画のような出来事が実際に起こっていること、自分の気持ちを隠さずに行動しがちな未成年がこうした偏見を表に出したことを考え合わせると、多民族国家を誇っているカナダでもまだまだ人種差別意識が根深く存在していることが窺える。侮蔑的な偏見だけでなく、固定観念による偏見も当事者にとっては不快なものである。カナダのおみやげ物屋、民芸品店でよく見かけるものに、先住民の手によるものとして売られているビーズをあ

しらったバッグ、衣類、装飾品がある。もちろん、伝統的工芸を生業にしている先住民もいるわけで、その技術を継承し、製品として販売することはいいのだが、一部の先住民の職業が現代の一般的生活人としての先住民にまで敷衍されることは問題である。ゴードン母娘のようにごく普通の都会生活を送っている先住民にとって、少数民族であるがゆえに注がれるバイアスのかかった視線は不愉快極まりないものであろう。

一方、現在のカナダ先住民の中にも、自分たちの伝統的生活様式・技術が過去のものとして消えてしまう前に、それを保存し伝達していこうと願って、行動する人たちがいる。ドキュメンタリーフィルム『最後のムース皮の船 (The Last Mooseskin Boat)』⁴⁾ は、1982年にナハニの北方に住む先住民デネーが協力して船を作る様子を記録したものである。かつてこの地域のデネーは春になると、川を下って取引の場所に物資を運ぶため、身近な材料で毎年船を作っていた。ムースを獲り、剥いだ皮を広げて干し、森の木で作った枠を取り付けて、頑丈な船を作り上げるのである。時代が移りこのような船もすたれてしまった折、伝統技術を記録に残そうと年長の先住民の指揮の下、若手の人たちが協力して「最後の船」を作ったのである。この船は現在イエローナイフのノーザン・ヘリテージ・センターに展示されているが、長さ13.1メートル、幅2.3メートルあり、かなり大きなものである。ここには他にも、樺の木の皮で作ったカヌーやカヤックなどが保管されている。このような自然のままの材料を使った船は1940年代以降、めっきり作られなくなったとのことで、今は博物館の展示品としてかろうじて昔の姿をとどめているのである。

このような現象はカナダ先住民の文化に限ったことではない。50年、100年前の生活・文化が変化し、消滅していくのは、当然のことである。その中であって、伝統を保存しようと努力する人もいれば、今現在の生活をするのに一生懸命な人もいる。どんな民族であろうと、どこ出身者であろうと、それぞれが大切にしているもの、守りたいものは千差万別なのである。都会で暮らすゴードン親子は、偏見を排除し、自分たちの尊厳を大切に、生活が続けていきたいと願っているし、船を作ったデネーは、自分たちの伝統文化を保存したいと願い、記録をフィルムに収めたのである。船を作るときに彼らの服装は、ジーンズにシャツという作業に適したものであって、当然のことながら、「ヨーロッパ系」の人たちに見せるための伝統的な服など着ていない。多数派のヨーロッパ系カナダ人が、現代の先住民に対しても、過去のイメージを重ねて見ているとしたら、その視線は自分たちの外にいる「他者」に向けられたものであり、見ているつもりの対象は「想像された」ものなのである。先住民のメッセージに耳を傾け、「虚像」ではない「実像」の彼らに目を向けることが、今いっそう求められているのではないだろうか。

[注]

- 1) Alan D. McMillan, *Native Peoples and Cultures of Canada*, Vancouver/Toronto : Douglas & McIntyre, 1995, p. xi. および、日本カナダ学会・カナダ総領事館共催「カナダ講座」資料 (2004 / 8 / 27) による。
- 2) エドワード・W・サイード著、今沢紀子訳『オリエンタリズム』平凡社、1986年、8頁。
- 3) ベネディクト・アンダーソン著、白石さや・白石隆訳『増補 想像の共同体』NTT出版、1997年、250頁。
- 4) 筆者が2004年7月24日、当博物館で確認した展示資料による。
- 5) 人口構成、政府機関については次の文献とホームページを参考にした。

Hancock, Lyn. *Northwest Territories*. Toronto: Grolier Limited, 1993.
Government of Canada Official Website_Provinces and Territories,

www.canada.gc.ca/othergov/prov_e.html 2004/07/14

- 6) Edward J. Hedican, *Understanding Aboriginal Issues*, Toronto Buffalo London: University of Toronto Press, 1995, p. 5.
- 7) Daniel Francis, *The Imaginary Indian*, Vancouver: Arsenal Pulp Press, 1992, p. 9.
- 8) Palmer Patterson, *Indian Peoples of Canada*, Toronto: Grolier Limited, 1982, p. 79.
- 9) McMillan, *op. cit.*, p. xi.
- 10) *Ibid.*, p. x.
- 11) *Ibid.*, p. ix.
- 12) Hedican, *op. cit.*, p. 40.
- 13) *Ibid.*, p. 40.
- 14) *Ibid.*, p. 27.
- 15) Website of Modern American Poetry_Paul Kane By Diane Eaton and Sheila Urbanek, www.english.uniuc.edu/maps/poets/a_f/alexie/kane.htm 2004/09/19
- 16) Francis, *op. cit.*, p. 16.
- 17) *Ibid.*, p. 16.
- 18) Website of Modern American Poetry. *op. cit.*, _Kane and Imperialistic Discourse by Heather Dawkins.
- 19) Francis, *op. cit.*, p. 21.
- 20) Website of Modern American Poetry. *op. cit.*, Heather Dawkins.
- 21) *Ibid.*, p. 5.
- 22) Francis, *op. cit.*, p. 21.
- 23) Website of Modern American Poetry. *op. cit.*, Heather Dawkins.
- 24) 新保満／ストラザーズ、シンサ・アン『変貌する先住民社会と学校教育』御茶の水書房、1999年、24頁。
- 25) Francis, *op. cit.*, p. 57.
- 26) Patterson, *op. cit.*, p. 68.
- 27) Francis, *op. cit.*, p. 87.
- 28) *Ibid.*, p. 93.
- 29) NHKホームページ www.nhk.or.jp/daishizen/daisougen/fk_bh_01.htm 2004/09/04
- 30) Francis, *op. cit.*, p. 95.
- 31) 時代背景については、次の2文献を参考にした。
綾部恒雄編『もっと知りたいカナダ』弘文堂、1989年。
Gillmor, Don. *Canada: A People's History*. Toronto: McClelland & Stewart Ltd, 2001.
- 32) Website of Voices from the Gaps, University of Minnesota_Emily Pauline Johnson, voices.cla.umn.edu/newsite/authors/JOHNSONemilypauline.htm 2004/09/22
- 33) *Ibid.*, p. 2.
- 34) Francis, *op. cit.*, p. 113.
- 35) *Ibid.*, p. 119.
- 36) Website of Voices from the Gaps, *op. cit.*
- 37) Francis, *op. cit.*, p. 133.
- 38) *Ibid.*, p. 131.
- 39) *Ibid.*, p. 138.
- 40) Website of Library and Archives Canada_Heroes of Lore and Yore, www.collectionscanada.ca/2/6/h6-230-e.html 2004/09/23

- 41) Patterson, *op. cit.*, pp. 14-18.
42) Francis, *op. cit.*, pp. 136-147.
43) Daniel Prouty (Writer/Co-director) , *For Angela*, National Film Board of Canada, 1993.
44) Raymond Yakeleya (Director) , *The Last Mooseskin Boat*, National Film Board of Canada, 1982.

[参考文献・資料]

<邦文文献>

綾部恒雄編『もっと知りたいカナダ』弘文堂、1989年。
アンダーソン、ベネディクト 白石さや／白石隆訳『増補 想像の共同体』NTT出版、1997年。
サイド、エドワード・W. 板垣雄三／杉田英明監修、今沢紀子訳『オリエンタリズム』平凡社、1986年。
新保満／ストラザーズ、シンサ・アン『変貌する先住民社会と学校教育』御茶の水書房、1999年。

<英文文献>

Francis, Daniel. *The Imaginary Indian*. Vancouver: Arsenal Pulp Press, 1992.
Gillmor, Don. *Canada: A People's History*. Toronto: McClelland & Stewart Ltd, 2001.
Hancock, Lyn. *Northwest Territories*. Toronto: Grolier Limited, 1993.
Hedican, Edward J. *Applied Anthropology in Canada: Understanding Aboriginal Issues*. Toronto Buffalo London: University of Toronto Press, 1995.
McMillan, Alan D. *Native Peoples and Cultures of Canada*. Vancouver Toronto: Douglas & McIntyre, 1995.
Patterson, Palmer. *Indian Peoples of Canada*. Toronto: Grolier Limited, 1982.

<邦文資料>

日本カナダ学会・カナダ総領事館共催「カナダ講座」資料、2004/08/27
NHKホームページ www.nhk.or.jp/daishizen/daisougen/fk_bh_01.htm 2004/09/04

<英文資料>

Government of Canada Official Website_Provinces and Territories,
www.canada.gc.ca/othergov/prov_e.html 2004/07/14
Website of Modern American Poetry_Paul Kane By Diane Eaton and Sheila Urbanek,
www.english.uniuc.edu/maps/poets/a_f/alexie/kane.htm 2004/09/19
Website of Voices from the Gaps, University of Minnesota_Emily Pauline Johnson,
voices.cla.umn.edu/newsite/authors/JOHNSONemilypauline.htm 2004/09/22
Website of Library and Archives Canada_Heroes of Lore and Yore,
www.collectionscanada.ca/2/6/h6-230-e.html 2004/09/23

<英語ビデオ・フィルム>

Prouty, Daniel (Writer/Co-director). *For Angela*, Ottawa: National Board of Canada, 1993.
Yakeleya, Raymond (Director). *The Last Mooseskin Boat*, Ottawa: National Film Board of Canada, 1991.